

南支

中国戦線（鯨部隊）の思い出

愛媛県 篠原晴徳

私は篠原晴徳です。大正十年五月十三日生れ、昭和十七年四月十五日、高知歩兵第四百四連隊補充隊歩兵砲中隊に教育召集で入隊し、中支、南支、と中国戦線を駆け巡り、教育、警備、討伐作戦に参加、この期間実役四年二ヵ月、加算七年二ヵ月、計十一年四ヵ月で恩給資格者、一時恩給該当です。

入隊の時の家庭の状態は、

祖父

死亡

祖母

〃

父 健在

母 〃

本人 〃

弟四人 〃

妹三人 〃

で、家業は和紙の手漉き業でした。私が召集で故郷を出発する時は、召集入隊者三名で寒川駅前の壇上に並び、全村の人々の盛大な見送りを受け、「勝つてくるぞと勇ましく」と出征兵士を送る歌の歌声に祖国の安泰と、民族の存続を念じ、車中の人となり、勇躍応召致しました。

従軍の全期間を回顧してみて、

①一番怖いと思ったのは、湘桂作戦（第一次）中の、

赤山島敵前上陸（昭和十九・六・二）

②一番苦しいと思ったのは、同作戦中の、金蘭寺への強行軍、続いて第二回目の強行軍(昭和十九・七・六より)

七・六より)

③一番辛いと思ったのは、湘桂作戦(第二次)中の、新寧の山越(昭和十九・九・上旬)等の戦場経験が印象深く思い出されます。

次に入隊時より順次に思い出話を致します。先ず、内地入隊当初の教育期間で、内務班は第一班でした。中隊事務室の扉を開くと直ぐ第一班がありました。私のすぐ隣に班の先任兵長がおりました。ノモンハンの生き残りの蹄鉄工兵です。

毎朝、点呼が終わるとすぐに工場へ行きます。この先任兵長が私を大事にしてくれ、他の古兵が私をいじめようとすると睨みをきかしてくれます。だから私は個人的制裁はなく、あつても班全員に対する制裁のみで助かりました。また洗濯物は「お前に班内でさせて盗まれると困るから、工場の方でやらす。心配するな」と言ってくれて今でも感謝しております。

また毎夕、週番士官が点呼に来る時、第一班の真先

に私の前へ来るような室の配置になっておりました。入隊早々、週番士官が私に「軍人勅諭を言うてみい」と言うので、私は入隊前に勉強していたので、直ぐにつまらずにスラスラと答えました。週番士官は喜んで班長に対して、「今度の補充兵は優秀である」と申されました。

兵庫県の青野ヶ原まで行って二週間、戦車隊と演習をし、一期の検閲を受けに高知の屯営へ帰りました。

高知の連隊本部の前の広場へ、歩兵砲中隊の速射砲だけ戦車を目標にして連隊長の検閲を受けた時、小隊長が「四番戦死。交替」と大声で叫んだ。私はすぐ走って砲手交替しました。連隊長は馬から下りて砲の横へ来て、上体を曲げて眼鏡をのぞきこみ、ニッコリとして「よし」と大声で言い、また、馬に乗り砲側を離れました。連隊長の合格を貰ったと言って、班長・教官・中隊長が喜んでくれて、私は拔擢をされました。こうして、いよいよ野戦出發を控えて、私は班长室へ呼ばれて、「教官も班長も揃ってお前を屯営に残して、次に入ってくる補充兵の教育要員にする。どうか」

と問われました。私は「戦友が皆野戦へ行くのに自分は内地に残るのは嫌です。是非戦友と共に野戦へ出して下さい」とお願いしました。班長は教官と相談して、「本人の希望通りしてやろう」とのことで私は皆と一緒に中支へ出るようになりました。

ところがこれが幸いして、結果としては私は生きて復員しました。聞くところによると、内地へ残った者は次の動員でニューギニアへ送られ、昭和十八年一月二日ブナ地区において、第一四四連隊長山本重省大佐をはじめとして全員玉碎戦死したとの由です。人間万事「塞翁が馬」でしょうか。

とにかく私たち野戦転属者は七月二十日坂出港出発、八月十三日湖北省蒲圻県羊楼洞着、第四十師団歩兵第二三六連隊歩兵砲中隊へ編入されました。以後は教育、警備、江北、江南殲滅作戦および駐屯地の討伐、湖南省臨湘県長安付近の掃滅作戦に参加、そして最後に「駐屯地のない長途の作戦」「歴史に残る湘桂作戦」に出動した。

次に四国師団史より抜粋し湘桂作戦の目的と大要に

ついで述べる。

「昭和十九年四月十八日、粵漢鉄道打通作戦をもって開始。北支の第十二軍（司令官内山英太郎中将）は黄河南岸の鄭州に向かって行動を開始した。一方、中支の第十一軍（司令官横山勇中将）も一部をもって漢口、信陽から行動開始北上した。支那派遣軍は、この作戦を序曲として河南省、湖北省、湖南省、江西省、広西省、貴州省、広東省、浙江省、福建省の九省に及ぶ大作戦を展開し、支那にある米空軍基地を押し、内地本土の空襲を食い止めると共に、南太平洋方面の戦況が「守」に転じたため、広大なる戦線への補給ルートは、逐次切断されつつある現況下に、新たに支那大陸を経由して鉄道による補給ルートを確保すると共に、南方の資源を内地に輸送するという計画に基づき、延々一五〇〇キロに及ぶ戦線に作戦行動を展開したものであった。

東南太平洋方面の戦況がいよいよ切迫してきた昭和十八年の晩秋、支那大陸を基地とする在支米空軍が突如、台湾の新竹に襲撃するという事態が起こった。そ

これは支那南東部の江西省から飛来したものであったが、米機の台湾来襲は、当時支那が発表していた支那大陸から日本本土への空襲も単に宣伝だけでなく、今や実行の段階にきていることを示したものであり、また近くB 29が出現したならば、支那南東部からでもわが本土を空襲できるものと考えられた。

このことは強く大本営を刺激し、これが口火となって昭和十九年五月下旬、第十一軍は武漢地区より作戦を開始し、約五カ月の予定で支那西部の敵主要基地である衡陽、桂林を攻略した後、粵漢鉄道沿線を占領、確保することになった。この作戦は広大な支那大陸の中部から南部にかけて縦断するもので、その距離はなんと一〇〇〇キロにおよび、これまでの徐州会戦、武漢攻略戦とは比べものにならないほど大きく、また計画の段階で終わったが、その規模は支那大陸における作戦のなかで最大といわれた重慶攻略戦の規模と同じ程度のものであった。

第十一軍は初め兵力を二線に区分し、第一線として湘江以西に第四十師団、湘江以東に四個師団を展開し、

また二個師団を第二線として南下進撃することにしたが、この部隊運用で第四十師団を湘江以西に起用したのは、師団がしばらく岳州付近にあつて水郷地帯の作戦に慣れており、洞庭湖の舟艇機動には最適の兵団と見ていたからである。

我が四十師団が昭和十四年に中支に渡って以来、これまでに参加した各作戦においては、ある目標に進出して、その地区の警備をした後、原駐屯地に帰還するのを常としていたが、今度の作戦は、二度と警備地に帰らないで、行く先が我が家というものであった。

師団は、独立混成第十七旅団(峯)に岳州一帯の警備責任を申し送り、昭和十九年五月初旬、石首、華容地区に集結した。

二十七日、軍の最右翼兵団であるわが師団は、石首付近に集結の仁科、小柴両連隊を梅田湖を経て南県へ、また戸田部隊を華容方面から南山を経て、三仙湖市へ南下させた。

「註」六月一日、仁科連隊長は平水舗において敵機の爆撃を受けて戦死、連隊本部付の堀内勝美大

佐が、歩兵第二三五連隊長に発令された。

師団の将兵にとって、この進攻経路は、過去二回、江南及び常德作戦で経験ずみの歩き馴れたところである。敵の組織だった抵抗もなく、師団は順調に南下を続け、三十日には早くも洞庭湖畔に進出していった。

赤山半島（師団の将兵は鬼ヶ島と呼んでいた）は、赤土の山が高く、東西洞庭湖に突出した半島で、ここを守備している敵は、湖面に機雷その他の障害物をめぐらし、また半島の北端を最も堅固に陣地を構築し東西両面にも陣地を占領していた。このような敵状の外に師団が渡湖するにあたって、最も注意しなければならなかったことは米空軍の爆撃であった。当時、支那大陸における制空権がすでに米空軍にあつて、赤山半島の渡湖は空襲の危険を伴っていたからである。そして師団は、六月一日夜、小柴部隊を敵防御配備の脆弱部である半島西岸に奇襲上陸させ、この方面から戦果を拡張することにした。」

さて、この湘桂作戦にあたり第二三六連隊歩兵砲中队では、大沢小隊長が、「おい、篠原、お前は速射砲

小隊に編入しておく。しつかりやれよ」と編成の命令がありました。ところが直前になって大沢小隊長より、「おい、篠原、お前は中隊長殿と一緒に連隊本部へ行くことになった。そのつもりでやれ」と言われまして、私は中隊指揮班の隊長伝令として中隊長佐々木春隆大尉（陸士五十四期）とともに連隊本部へ行くことになりました。歴代の歩兵砲中隊長は中隊長の兼務として連隊作戦主任であるため、中隊におることよりも連隊本部におることの方が多い状態で、私はその伝令になり乗馬と騎銃を与えられ、いつも隊長と行動を共にするようにになりました。その期間は昭和十九年四月十七日長安出發より昭和二十年五月、佐々木砲隊長が歩兵第二三五連隊第一大隊長に栄転までの一年あまりの期間でした。

私が佐々木さんの伝令になったことは、どんな理由があつたのでしょうか。歩兵砲中隊長が交替して、新任の隊長は私のような一補充兵を御存知のはずがない。人事係准尉の關係もないと思う。ただ一つ、想像されるのは銃剣術大会のことらしい。

それは軍旗祭の時連隊で中隊對抗の銃剣術大会が行われた。歩兵砲では誰を代表選手にするかで隊内でトーナメントがあり、その時私が運よく優勝して中隊代表選手となり、連隊の大会に出ました。結果は一回戦で勝ち、二回戦で負けました。この銃剣術大会の選手になったことらしい。伝令になったのは。

いよいよ赤山半島敵前上陸―私の従軍期間中一番怖い体験―の模様を話します。われわれは赤山半島上陸のことを「鬼ヶ島へ鬼退治に行く」と言っておりまして。

師団は赤山半島の攻略を重視しており、同島攻略のためには、たとえ一個連隊を犠牲にしても止むを得ぬと考えていることを聞かされていただけに、いよいよ明日は鬼ヶ島に上陸して敵の要塞砲と対決をするのかと思うと実に身の引き締まる思いであり、あるいは我々も最後かもしれないと思えば、二十幾年の来し方が走馬灯のように脳裏を駆け巡る思いであった。

出発は六月二日午前三時である。工兵隊の舟艇に乗る直前、各小隊毎に「決死的出陣に当り宮城を遙拝し、

祖国の安泰を祈る。頭右ッ」と東方遙かに祖国に訣別をし決死の覚悟で降りしきる五月雨について真暗な湖面へ向け大発舟艇群に分乗した。やがて全員乗船の確認が終わり舟が発進する。暗夜、降雨、視界零の湖上を全速で進む。しばらく行くと先発の舟艇が水路が違うといつて引き返して来た。

工兵隊は何をしとるかといいたくなるが仕方がない。まごまごして夜が明けたら大変だと、その間気のもめること、どうしようもない。そうこうしている間に早くも東の空が白み始めたが、やっと舟艇は錯綜した水路を抜けて、洞庭湖の真中に前進出来た。右も左も洋々として海のように見える。舟艇は真一文字に全速力で、目指す赤山半島に向かい突進する。その時ドシンと衝撃を受けゴリゴリと船底が何かを乗り越えた。アツ敵の機雷に乗り上げたと思感した。南無三これでおしまいかと息を呑む。しかし船艇は大きくゆれたが爆発しない。誠に天祐神助か、それは不発機雷であった。船尾を振り返ると直径一メートル位の黒い機雷がぼつかりと浮んでいた。若し爆発していたら砲

もろ共全員湖上で木ッ端微塵に散っていたであろう。

いよいよ目指す鬼ヶ島は目前に迫った。突然けたたましく敵の銃声が見え、敵に発見されたのだ。全員艇中に低く伏せて鉄かぶとの紐を引き締める。敵の一斉射撃はますます盛んとなり、舷側にブスブスと敵弾が飛んでくる。板子一枚下は洞庭湖の水の中。そのうちに敵の迫撃砲弾まで水柱をあげてくる。もうあかんと覚悟をきめたが、とにかく生きた心地がせんんだ。本当に怖かった。前の方では既に小銃隊が上陸してドンパチドンパチやっている。

舟艇は全速力で湖岸目がけて乗り上げた。雨にぬれた赤土にすべりながら、敵の銃弾が頭上をかすめて飛んでくる。「オイッ連隊砲は正面の敵陣地を射て」と命令があり、砲は直ちに結合陣地進入、間接照準で砲撃開始。一糸乱れぬ戦闘振りで一発また一発と赤山半島の朝もやを破って敵陣に炸裂する。第二中隊はその砲煙の下をかいくぐって突撃して行く。ようやく敵は陣地を捨てて散を乱して退却を始めた。退却する敵に榴散弾をうちかける。全員よく戦った。

敵の意表を突いた西岸からの上陸は大成功であり、心配された要塞砲は東方及び北方に向け据え付けられているため、第一大隊の迅速果敢な猛攻に抗し切れず、その日のうちに、赤山半島は完全占領した。しかしその薩には第二中隊の梅木少尉以下の尊い犠牲者を出し、また夕方には半島南端付近において、第一大隊本部の長津軍医大尉が敵の地雷のため無念にも散華された。痛恨の極みであった。

次に私の従軍中一番苦しかったことをのべます。即ち昭和十九年七月六日よりの金蘭寺への強行軍（ウナクリ街道）二往復のことです。

どの作戦にもそれぞれ特徴があつて、第二次長沙作戦といへば、正に苦戦の代名詞、浙贛作戦は水と股すれ、湘桂作戦中の金蘭寺への二往復は今以て「暑かつた作戦」で通っている。

部隊は赤山半島の制圧を終えて、引続き退却する敵を追撃して沅江、益陽、寧郷、湘郷を経て六月三十日には早くも永豊に突進したのであるが、ちょうど大陸性気候で一番蒸暑い季節であり、その上連日の追撃戦

で休むひまもなく将兵と軍馬の疲労困憊はその極に達した。せめて一時間でも大休止があればと心待ちにするが、追撃戦ではなかなか大休止がない。力尽きた戦友の装具を古年次兵が持つてやり、あえぎあえぎ前進する姿は各隊共に見られ、苦力を得た隊は苦力に装具を担がせているため、遠方から見れば支那軍か日本軍か判明し難い奇妙な部隊に見えたことであつた。

このような暑い苦しい毎日の繰り返しで、部隊は疲労その極に達している七月六日のことである。「死の行軍」金蘭寺への軍公路であつた。四〇度を越すと思われる猛暑、炎熱焼くがごとく、何と言つてもこの金蘭寺へ二往復の行軍は最大の辛苦をなめ尽くしたといえよう。

その日もまた雲一つない上天気で暑さがきびしい。連隊は反転して衡陽方面へ行軍し、次の作戦行動に移る予定であつた。ところが金蘭寺にあつた徳島部隊が敵の包囲下にあり全滅のおそれあり急速救援に行くという。この日また炎熱の中を強行軍である。軍公路は五〇メートル位で寸断され、油桐が点在するだけで日

陰はない。風はソヨとも吹かず赤土の丘陵に照りつける太陽は地上の生物を焼き殺す勢いである。

作業小隊は「商売、商売」とつぶやきながら切り取られた軍公路の応急修理に励んでいる。小休止をしようにも日陰はない。強行軍は二時間、そして三時間と続く。友軍の危急存亡のとき一刻も早くと部隊幹部もあせているのであろうが、人間の体力にも自ずから限界がある。そこを精神力で支えて進む。水筒の水などどつくの昔にない。すでに汗は出なくなり、顔は塩でザラザラしている。重い装具が肩に喰い入る。歯を喰いしぼり隊列に遅れぬ様足を進める。そこへ執拗に喰い下る敵機P40（戦闘機）におびえながら、まさに死の強行軍である。

青い空がその輝きを失い、周囲の風景が暗くなる。口の中はザラザラした感じで、頭にジーンと環が入つたやうで歩行の感覚を失ってくる。ウナクリ（日射病）患者の兆候である。朦朧とした意識の中に、わが家の井戸が浮かぶ。過ぎ去つた少年の日、冷たい澄み切つた井戸水を柄杓でゴクンゴクン呑んだっけ。

はかない追憶が、かすれた意識の中をかすめる。灼熱の金蘭寺街道は、その路側に点々と喝病の兵が横たわり、しばしの小休止の命令に、ホットしたであろう。補充兵の某兵は腹帯をといた鞍を握ったまま倒れて再び立ち上がることは出来なかった。まさに死の行軍である。

「再び、金蘭寺にたどりついた連隊は、ただちに黒須大隊（宝慶方面より機械化部隊を有する敵の大軍に包囲され、弾薬欠乏、死傷者続出し、大隊長は最早これ以上は陣地を守ることは不能と判断し、自ら襟章を取り外し、残存兵力を第一線中隊陣地に展開し、重傷患者には自決の用意をさせ最後の時をまっていたという）を救援の体制に入った。我が連隊砲も陣地進入を行ない第一線に配置された。かくして我が連隊の神速にして強力な救援により、九死に一生を得た徳島の黒須大隊は衡陽西方へ転進することが出来た。」と四国師団史に記されている。

前後二回にわたり金蘭寺への猛進撃は、参加将兵のひとつく忘れることの出来ない苦しい語り草となり、

「暑いと金蘭寺」が合言葉となったのである。

最後に私の従軍中一番辛いと思ったことについてであります。

すなわち、昭和十九年九月上旬頃の新寧の山越え（第二次湘桂作戦の間）のことです。

先ず湘桂作戦（第二期）の目的と大要についてのべると。

支那派遣軍は衡陽占領後、次期作戦に備えて統一軍（第六方面軍）を設け、岡村寧次大將が方面軍司令官となり、その戦闘司令所は、衡山と衡陽の間にある南岳に置かれた。

方面軍は、衡陽にある第十一軍（六個師団）広東の第二十三軍（二個師団）と佐野忠義中将の第三十四軍（一個師団）の外、直轄師団三個師団の総計十二個師団を指揮した。そこで次期作戦はまず桂林、柳州を攻略し一部をもって遠く貴州省にはいり重慶をおびやかすというものであった。そして第十一軍に呼応して広東の第二十三軍も梧州を突き、柳州へ向かい、その一部は南寧に進出して仏印との国境、鎮南関と衡陽―桂

林―柳州鉄道を結ぼうという雄大な戦略目的のもとに昭和十九年八月二十八日、先ず第十一軍は衡陽周辺から作戦行動を開始した。

我が第二三六連隊は、九月二日夜「小柴連隊は追撃隊となり、三日早朝出發湘桂公路を……に向い、昼夜を問わず一挙に追撃すべし。……」との師団命令を受けた。

連隊は三日早朝、第二大隊を前兵として追撃を開始した。湘桂鉄道と平行した公路に出ると、第十三、第五十八、第三師団の將兵が道一杯になり、先を争って前進している。その中に割り込み、できるだけ道路の右側を急進したが大変な混雑である。そこへ心配していた敵機が現われた。アツという間に急降下して襲いかかって来た。皆それぞれに逃げて避け、これが最後かと念仏を唱えていたが、幸い弾は当らずやと命拾いをした。

この時、一機が我が軍の対空射撃で撃ち落されたが、俺が撃った弾丸が当たったのだと功名争いになった。しかし結局決め手がなくそのままになってしまった。

白地市から軍公路を離れ、北側の石畳道に入った。軍公路を歩いていて、他の師団に紛れ込んでしまった者もあったようで、他師団の者と判ったが帰すに帰さず、連れて歩いたという話もきいた。

五〇分歩いて一〇分休憩、朝食、昼食は三〇分、夕食は一時間か二時間大休止をして、翌日の二食分を并当に準備するということで、昼夜おつ通しの急行軍になった。歩きながら眠る者もあり、落後者も続出する。「早く敵とぶつからんかなあ。そうすれば休めるのに」とぼやく者もある。

行軍は文明舗をすぎた四日の正午頃、敵の猛射を受けた。第一大隊が火炮を並べ、一斉射撃と共に突入し突破する。そこで第二大隊を前兵にして追撃を再開したが、間もなくチエツコや水冷式重機を持つ敵に前進を阻止された。小銃中隊の支援射撃と共に、見事な突撃でこれを一掃、それから個々の小抵抗を受けながら進んだが、五日朝にはその抵抗も一応終わった。敵は第六十二軍の第一五一師で、二塘の戸田連隊を苦戦に追い込んだ精鋭であった。

さらに追撃を続行していると、五日夕「敵は潰走中なり。山口舗を経て東安北方地区に向い引き続き急追せよ」との命令がくる。六日は敵の抵抗もなく追撃は順調であったが、兵の疲労は極限に達し、とくに衡陽で配分された補充兵の落後者が続出、中には手榴弾や小銃を使って自決する者も出て、痛ましい限りであった。この付近の土民は苗族といい凶暴であり、落後すると殺される心配が多分であったからである。

七日の夜明け方、とある部落に敵の大部隊が夜営しているのを発見した。第二大隊が急襲、全く無警戒の敵は算を乱して潰乱し、多数の遺棄死体と、中迫撃砲六門、重機六丁、軽機十数丁、弾薬は山積みされておるなど莫大な戦利品を得たが、その中にロケット砲という珍しい物もあった。また第九戦区高級参謀の張少将を捕虜とし、師団司令部に引き渡した。

さらに追撃を続け、八日夕方東安北側に迫ったが、足下に湘桂鉄道の線路が見えた。その時不意に汽笛が聞こえ、やがて長い列車が通過しだした。見ると有蓋無蓋の貨車に支那兵を満載している。待ち構えて軽機

と小銃で撃ちまくったが、列車はそのまま通りすぎ、鉄橋を渡ったと思うと轟音がとどろき橋桁が崩れ落ちた。零陵の方から退却してきた最終列車だったのである。急追撃の効果が現われ、敵の先廻りをした訳で、線路上には数条の血痕が帯のように残っていた。

東安の東北側で少しは休めるかと期待したが、また「小切に向い急追せよ」との命令が来た。夜に入り道は山道になった。夜中過ぎ前方に銃声や爆発音が起り、まもなく止んだ。重迫撃砲や通信機械、それに無数の書類が散乱していた。宿営中の敵第七十九軍司令部を急襲したらしい。

九日の正午前には小切に着いた。小さい盆地の中の寒村である。見廻わすと北、南、西に岬々たる連峰が続き、湖南、広西両省の省境の山脈で、上の方は雲に覆われよく見えないが、恐らく標高二、〇〇〇メートル以上と思われた。地図では小さい山が二ツ三ツ書いてあるだけが現地はとんでもない一大障壁である。山越えに備え、糧秣とくに塩の蒐集に努めたが収穫は少なかった。

この付近の住民は前にも言った苗族という獍猛剽悍な部族で、敵意が強く、少数と見れば襲いかかつて来るので、相当多人数の徵發隊を出さねばならない。蹄鉄の点検、患者の手当て、道路補修の準備などにも努めた。

いよいよ山越えである。九日夜には、「明日日早朝出發し、新寧を攻略した後、四板橋に向い急進すべし」との電報がきた。たった一晚の休養では疲れもとれないが致し方ない。

翌朝からの谷川沿いの行軍は捗ったが、三時間位すると渋滞しだした。山道に入ったのだが、道路といっても全くのケモノ道である。一進一退まるで尺取虫のように進む。見上げると先行部隊は頭の上の稜線を、右に左に胸突き八丁の急坂をよじ登って行く。正に九十九折で曲がり角は鋭角をなし、馬が荷を積んでいては曲がり切れない。乗馬者は皆降りて徒歩になったが、馬を一頭づつ引き上げ押し上げねばならない難所が数限りなくある。左は千仞の谷、右は覆い被さるような岩壁で、駄馬は荷がつかえて通れない。やむを得ず荷

を卸して馬を通し、荷は人力で運んでまた載せることの繰り返して、何頭かの馬は谷底に落ち、兵士が必死で砲や弾薬を上げる。その辛苦は筆舌に尽くし難いものがあつた。

見下ろすと、師団主力が谷を埋めて登る順番を待っている。全員汗びつしよりになつて喘ぎ、夕方四、五軒の部落に着いたが、馬小屋のような荒屋である。その頃から小雨が大雨になつた。夜の登山は危険なので大休止にしたが、休むにも入る所がない。皆行軍縦隊のまま雨に打たれて眠るより方法はない。しかも夜になると寒さが加わりガタガタ震える。食事といえ、不味い南瓜の、しかも塩がないから水炊きである。持ち遠しかった夜が明けて、また山登りが始まる。

ところが道の雨側は脱糞の行列で、臭いのに閉口した。崖道だから他に方法がなかつたのだ。行けども行けども上がり坂が続く。やつと峠らしい所が見え、ヤレヤレとそこへ着いて見ると、さらに高い山が前方に聳えて、上の方は雲に隠れている。馬が弱り転落したりして、砲や機関銃も臂力搬送になる。配属の独立山砲連

隊に、後の横綱、吉葉山関がいたが、一人で山砲の砲身を担いで登ったという話も聞いた。

今度はカンカン照りとなったが、木陰も水も無い。塩が無い上に睡眠不足、それに南瓜腹ときているから気が遠くなる。馬が動けなくなり、水囊を下げて谷底に降りて行く兵の姿はただ神々しく見えた。

その夜も行軍隊形のまま大休止した。時々爆発音がある。またついて行けなくなった補充兵が自決したのもであろう。歴戦の古参兵でもついてゆきかねるほどだから無理もないのだが、家郷で帰りを待っているであろう彼等の家族を思い、ただ痛恨の極みである。

翌十二日の朝も、脱糞の行列に悩まされながら必死で喘ぎ登る。昼頃水源が見つかり、水汲み休憩をして生き返る。昼過ぎ、やっと峠に出た。樹氷が珍しく、口に含むと美味だった。左には一際高い省境の山（王屏山）が聳えていたが、目の下には南北に走る谷と、新寧に通ずる小道が見える。

ここで第二大隊に新寧南側の台地を奪取し、第一大隊の新寧県城攻略に策応するよう命令があり分進する

ことになった。下り坂になったが、膝がガクガクして閉口する。

第一大隊は、白沙付近で南下して来た敵の縦隊を捉え急襲した。宝慶―新寧道に出ると、約一キロにわたる数え切れないほどの生温い遺体が折り重なっていた。こんな所に日本軍が現われるとは露思わず、全く無警戒だったのだ。

第一大隊はその夜、大夷水を渡り、十三日早朝より新寧県城の攻撃を開始、若干の敵の抵抗を排除して占領、我が方の損害はなく大成功であった。師団からは「機を失せず省境を越え、四板橋に向かい突進し、全県西側地区への攻撃を準備すべし」との命令を受けた。よって第二大隊に省境への進出が命ぜられた。省境の盤城嶺山脈は、急坂だが道は案外なだらかな良い道であった。途中で日が暮れ大休止した。省境の峠付近で敵の抵抗を予想したが、銃声は起こらなかった。

九月十四日昼近く、やっと峠についた。見ると下は目も眩むような千仞の谷で、道は右の大きな岩山の中腹を縫って右下がりには消えている。膝がガクガクする

のに困りながら石段道を降りて行ったが、忽ち一進一止、岩清水が湧いていると馬に水をやるので一向に進まない。しかも休憩しても道が狭く、駄載物を下す余地がない。その内遥か下の方で銃声がし、心配したが間もなく止んで、夕方近くやっと盆地に降りることができた。

この付近は現在も広西チワン族自治区になっているが、部落は意外に多く、内地の田舎と変わりない感じであった。四板橋への前進を準備していると、「全県は本十四日一時陥落せり。連隊は四板橋に駐留し、次期作戦を準備せよ」との連絡が入った。全県は広西防衛の第一線で、衡陽以上の堅固な既設陣地があると聞いていたので、我が師団も背面攻撃や退路遮断に使われるものと覚悟していたが、その必要がなくなつて、しばらく休養出来るというのだから皆喜んだ。

この五日間にわたる山越えは、四年にわたる戦場生活でも、初めてのそして最後の酷しい体験であり、参加した全將兵にとっては生涯決して忘れ得ぬものであった。ともかく道を間違えることもなく、天險を踏破

できたのは責任感と精神力の賜物であり、皇軍なればこそといえよう。それにしても哀れをとどめたのは、衡陽で到着した補充兵達で、未教育の上に長途の追及行軍の疲れを休める間もなく、十五日間の昼夜ぶつ通しの追撃行で、古年次兵でさえついて行きかねたぐらゐだから、その大部分が落伍し、中には自決した者さえ少なくないのであつて、正に悲惨の極みといえた。ただ無理な追撃を強行したため、相当の戦果を挙げることが出来、しかも我が軍の戦闘による死傷者はほとんど無かつたのである。

以上、私の四年余りの支那戦線従軍中の

① 一番怖かつた赤山島上陸作戦

② 一番苦かつた金蘭寺へ二回の強行軍

③ 一番辛かつた第二期湘桂作戦中の新寧の山越え

について述べました。復員後四十六年を経て私も高齢者となり記憶もはっきりしない点もありますから、

い、帰らざる日の記録 砲煙と青春

(元鯨六八八四部隊歩兵砲隊戦友会編)

口、戦友会誌 (歩兵砲隊戦友会編)

ハ、戦争は終わった ―ある副官の手記―

(著者 久米滋三)

以上三冊の戦友会資料に基づいて系統立て、また正確も期しました。御了解下さい。

南支で戦い続けた

鳳 歩兵第六十一連隊

岐阜県 谷 口 二 一

―谷口さんは何年生まれですか、連隊は岐阜でしたか。

私は大正十年生まれですので昭和十七年に入隊の予定だったのですが、昭和十八年の四月十日、岐阜ではなく鳥取の中部第四十七部隊に入営したので随分驚きました。後で聞いたのですが、岐阜連隊に補充兵が入って兵舎が満員だったためでした。

お蔭で、砂丘の所の粗末な兵舎でした。鳥取の連隊の人は砂丘での訓練で大変苦勞したと聞いていました

が、土の上と違って足は砂にめり込んで足腰が鍛錬される訳です。しかし、二十日ぐらい兵舎にいて、大した教育はなく直ぐ現地へ出発となりました。

原隊の南支から、初年兵幸領者の将校と他に下士官が二人、大隊からそれぞれ来ていました。五月十八日に命令が出て鳥取を出発、宇品港から出帆して広東の入口、黄埔へ着いたのです。

黄埔の港から列車で広東へ、西村という所の第四百四師団(鳳兵団)の司令部到着、私たちの第六十一連隊は南村にあつて、第二大隊第七中隊に配属、そこで初年兵の教育を受けました。我々の団体の岐阜県の幹部の岩田さんの次弟秀信君と一緒にだった。彼は中隊は違つたが同じ高山出身で、体の大きいゴツイ人で、ドラム缶を担げるのはあの人ぐらいだった。中隊は違つても同じ大隊でした。

広東も雨季に入っていて雨の日にはなかなか会うことも無かつたが、同郷の彼もいることで、お互いに何んともなく心強かつたですね。

―鳳兵団は大阪師団管区だったので、名古屋師